

V ま と め

本調査区域が館跡の南西端に位置するため城館に関連する遺構数が少ないことや出土した遺物がないことから、周辺の城館跡や城主について、また調査区周辺にある石塔（婆）についても若干言及し、まとめとする。

1. 遺構について

(1) 曲輪およびテラス状遺構

本館跡のつくりは丘陵頂部を中心に規模の大きい曲輪が主郭を取り囲むように分布し、この部分に構造物が建てられていたことは推測できた。しかしながら今回調査を行った部分は丘陵中腹付近に位置し、規模の小ささと主郭との位置的關係を考えると明らかに主郭部分を守るための前衛的な防備施設であることがわかった。調査区北西側から検出した曲輪及びテラス状遺構は斜面に対して重複を避けるように配置しており、幅は比較的狭い。一方南東側から検出した曲輪は階段状に連なっており、広めの構造となっている。北西側の遺構は投石などの攻撃の際に足場として利用していたと思われる。南東側の曲輪は何らかの施設が建っていた可能性が考えられるが、柱穴は確認できていない。

(2) 堀跡・土塁

調査区北西側で検出した堀の深さは場所によって（調査区外）7mを超すところもあり、西側からの侵入に対して高い防御性を持たせた構造になっている。ただし、旧一関街道として利用されていたり、機械によって部分的に壊されたこともあったようで当時から現在のような規模であったかは疑わしい。堀跡に沿って構築された土塁は推定される山体の傾斜と土塁断面の様子から堀をつくる際に発生した排土を利用していると考えられる。

2. 縄張りについて（第15図）

楊生新城館跡は、縄張り図および航空写真からもわかるように現熊野神社境内を主郭とする囲郭式の中世山城である。主郭の西側には井戸跡と見られる窪みがあり、南西隅には外柵形の虎口を伴っている。その主郭を中心として曲輪がほぼ東西に対照的に羽を広げたような形で段状に連なっている。城館の東方、北方には北上川があり、西側には堀を設置している。また、南西側（調査区域の北西）には攻撃の際の足場に利用したと思われる複数の曲輪やテラス状の平場があり、そこから南側の旧参道にかけては自然地形の切岸状態になっている。旧参道より東側には比較的面積の広い曲輪があり、駐屯所的役割をもった施設が建っていたのではと推察している。大手門は郷土史「弥栄の里」ではこの旧参道にあったとしているが、縄張り図作成の際の調査では北西側にあった可能性も考えられた。

東方・北方および西側は北上川・堀によって囲まれ防御性を重視した構造になっており、南西側は当時大崎嶺と接する地点でもあり、攻撃性を持たせた構造としたと考えられる。

3. 周辺の城館と楊生新城の役割について

楊生新城と同時期（永正～天正年間）にあったと考えられる流郷の城館については、第3表及び第16図を参照頂きたい。中世の流郷にある城館は花泉の須崎城、金沢の大槻城を除きすべて山城である。場所は部落や耕地を一望できる小高い丘陵を背にした丘のような場所が多い。いざ戦争が起きたときの最後の防ぎ場所

として頂上に平坦な広さを確保しており、要害の地にはそれぞれの役目をもった出城をおいている。歴史的背景でも述べたが、峠城千葉氏が永正四年（1507年）に金沢の騒動により衰退すると、葛西氏の命で桃生郡の寺崎氏が峠城（菟明館）に転住している。寺崎氏は葛西氏の支流で葛西氏の信任が厚く、流郷の総領職的役割を持っていたようである。「花泉町史」の中で史家が峠城及び寺崎氏について次のように述べている。

「峠城（菟明城）は北上川狭窄部を城中から俯瞰する位置にある。流郷をも俯瞰できる枢要の地である。社鹿・石巻方面より北上川河川の舟航を監視すると共に、流廿四郷を押さえ、三迫・栗原方面及び東山方面への交通を扼するため造船・舟の術にも詳しく、兵馬に長ずる寺崎氏が峠城主に起用された。」

楊生郷は北上川の監視と北西側からの侵略に対する防御を行うという、峠城寺崎氏の最も重要な役割を担った場所にある。峠城主寺崎常清が信頼する弟明清をその領治に当たさせたのもそのためであろう。

4. 城主について

流郷の各城主は争乱ごとによりかなりの変動があり不明な点が多く、楊生新城の城主についても諸説に違いがみられる。以下に主だったものを載せて推察してみる。

①熊野神社（楊生新城主郭跡）の参道入り口にある立て札より

熊野神社は正応五年（西紀1292年）八月当郷の城主、葛西家臣千葉山城守持高の祈願にて居館館山（旧館）に社殿を建立し、楊生村の鎮守として紀州牟婁より三熊野大権現の神霊を勧進し奉りしに創まり、其の後式百六拾余年間、戦国の世の変遷を経て社殿も破壊せしかば持高の裔孫千葉山城守持家、弘治貳年（西紀1556年）九月、新館山（現在地）に社殿を造立し神霊を遷し再興し爾来今日まで凡そ四百参拾余年間、氏子一同（本郷、平沢、川崎一部）を以て社殿を修復し祭祀を行い御神徳を仰ぎ奉りて、家内安全、氏子繁栄、五穀豊穡、交通安全、国家安寧、世界平和を永大祈念し鎮守神として崇敬し奉るものなり

この札によると鎌倉末頃の楊生古城の城主は葛西家臣千葉山城守持高で、弘治二年に楊生新城（調査遺跡）に居館が移っていた時の城主は持高の裔孫の千葉山城守持家であったように窺える。「岩手県史」にある流郷の領主名の系図にはこの二人の名前は見あたらないが、鎌倉時代東北の所領を給与された武将たちは関東の本領にいて、その一族または家臣を代官させているので、千葉持高は代官として楊生古城に居し土豪となつて持家の代までつづいていた可能性は考えられる。

②郷土誌「弥栄の里」～弥栄文化財史関係資料にある沼畑（楊生新城の所在する地区）の上館の記録より

文武常大宝年中阿部朝臣正仁居館後葛西之臣千葉上野守良胤之に居る天正十八年八月千葉山城守持家に至り落城す。

この記録には文武天皇時代にすでに阿倍朝臣正仁によって居館が築かれており、鎌倉時代に葛西氏の家臣千葉上野守良胤之が城主となって、天正年間の千葉山城守持家の代に落城したとある。千葉上野守良胤之は源頼朝によって磐井・亶理郡等を与えられた千葉頼胤の長子良胤（＝則胤：東山長坂城主）のことであろうか。また、良胤之と①説にある千葉山城守持高に繋がりがあるかはこの記録からは分からないが、落城前の城主千葉山城守持家と①説から窺える弘治年間の城主名とは一致する。

③岩手県史より

永正四年（西暦1507年）九月、以前の流郷峠城主千葉下野守時胤が金沢冬胤と合戦し敗退した折り、桃生郡より寺崎刑部大輔常清が峠城に転住し峠寺崎氏の祖となる。常清の舎弟明清が楊生郷を領治し、楊生城千葉氏の祖となる。